

吉川幸次郎

鳳鳥不至

新潮社



鳳鳥不至

ほうちようふし

論語雜記

新井白石逸事

昭和四十六年十一月二十五日 印刷
昭和四十六年十一月三十日 発行

定価 九五〇円

著者 吉川幸次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(三局)一一(大代)

振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社
© Kojiro Yoshikawa

製本・神田加藤製本所
Printed in Japan 1971

目次

論語雜記その一	七
---------	---

その二	二二
-----	----

新井白石逸事その一	三二
-----------	----

その二	五四
-----	----

その三	七四
-----	----

その四	八九
-----	----

その五	一〇四
-----	-----

その六	一二
-----	----

新井白石逸事その七……………一五

その八……………一五三

その九……………一七二

その十……………一八四

新井白石と清人魏惟度……………一九六

附録 康熙帝に関する新井白石の書簡……………二三三

跋……………二三五

鳳鳥不至

論語雜記
新井白石逸事

論語雜記 その一

子曰、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫、

「論語」の第九篇「子罕^{しかん}」篇の、第十九章である。普通に、

子曰^しわく、鳳鳥^{ほうちよう}至らず、河^かは図^とを出ださず。吾^やれ已^やぬる^{かな}矣夫。

と訓読されている。「論語」としてはむしろ例外的に、めずらしく神秘に触れる章である。

子曰^しわく、とは、いうまでもなく、孔子の言葉であることを示す。孔子とその弟子たちの言行録である「論語」という書物の、編者は分からない。編者は、書中もとても多くを占める孔子の言葉を、おおむね「子曰」の二字をかぶせて記録する。これもそうである。「孔子曰」をかぶせて記録するのは、より少ない場合としてある。「子^し」の字は先生を意味する。編者にとって「子」といえば、すなわち孔子であつた。

鳳鳥とは、鳳凰である。いつもは中国に姿を見せない。どこか中国以外の地域にいる。ただ中国に、「聖王」すなわち完全な人格者の帝王が現われ、「太平」すなわち完全平和の世の中が出現したときに、その祝福として、中国に飛来する。しかし孔子の時代は、乱世であった。奇瑞の鳥は、やって来そうにない。それが、鳳鳥至らず、である。

またそうした「聖王」の時代には、黄河の水中から、すぐれた法則を示す図形が、出現する。しかしこの奇蹟も、鳳鳥の奇蹟とおなじく、おこらない。河は図を出ださず。

今は「聖王」と「太平」への可能性のない時代である。吾れ已んぬる矣夫、わたしは絶望するほかはない。

意味の外廓となる方向が以上のものであることは、諸家の注の説くごとくである。私の「論語」の注では、朝日新聞社版上冊二七六頁。筑摩版吉川幸次郎全集四卷二六八頁。また筑摩版世界古典文学全集四卷一三七頁。

今世紀のすぐれた英訳者 Arthur Walay の “The Analects of Confucius” Book Ⅸ は、次のような英語におきかえる。

The Master said, The phoenix does not come ; the river gives forth no chart. It is all over with me !

またその中国人による発音を、大陸のローマ字によって表記すれば、次の如くである。

zì yuē, fēng niǎo bù zhī, hé bù chū tú, wú yì yì fú.

外梓の子曰は別として、あとは、

鳳鳥不至
河不出圖
吾已矣夫

と、四音の句三つが、リズムを成して流れる。そのリズムは大へん美しい。

西洋紀元前五百年の孔子のころ、あるいはその死後間もなく「論語」が編集されたころの漢字音が、今の中国の音と、いくつかの差違を示したであらうことは、「古事記」「万葉集」の仮名の音が、今のそれと同じでないのと一般であること、十八世紀以来の東西の学者の力説するところである。同時にまたこの章の音声の美しさが、今は充分に追跡しがたい古代音においても、現代中国音の示すものと、ほぼ同じ比率にあったであらうことも、多く疑うを要せぬ。

また「論語」は、二千年にわたる流伝の間に、いろいろと異本を生んでいる。異字はもっともしばしば、いわゆる「助字」の部分に存在する。「助字」とは、句の意味の中核となる部分でなく、句の周辺にそわって、感情の揺曳を、リズムの揺曳として表現する字である。也の字、

之の字の類であり、この文章についていえば、吾れ已んぬる矣夫の、矣夫^{かな}である。こうした「助字」が、一本には有り、一本には無くして、文章のリズムに、あるいはその内容に、微妙な陰影の差違を生むこと、他の章ではしばしばである。たとえば開卷の「学而」篇の第二章の終り、普通の本では、

孝弟也者、其爲仁之本與、

であり、それについて、すでに二つの読み方がある。

孝弟なる者は、其れ仁を爲すの本^かと。

と読むのが一つ、

孝弟なる者は、其れ仁の本^かと。

と読むのが又一つであるが、日本の古写本には、更にまた爲の字のない本が、しばしばである。

孝弟也者、其仁之本與、

孝弟なる者は、其れ仁の本^かと。

日本風の訓読では、そのことが顯著でないが、

xiào tì yě jě, cí rén zhī běn yú

と、

xiào tì yě jě, cí rén zhī běn yú

とでは、リズムがちがひ、感情がちがって来る。

しかし当面のこの章には、そうした異同がない。どのテキストも、

子曰 鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫、

であり、異同があるのを、少なくとも「論語」そのもののテキストとしては、知らない。つまり、

fèng niǎo bù zhì

hé bù chū tú

wú yǐ yì fū

という三つの四音のリズムが、孔子の嘆息の深さを伝えるものとして、古往今来、流れつづけている。

ただ司馬遷の「史記」の「孔子世家」に、

子曰わく、河は図を出ださず、雒は書を出ださず、吾れ已んぬる矣夫

というのが、この章の異文であるとすれば、それだけが例外となる。しかしそれも、

河不出圖、雒不出書、吾已矣夫、

と四シラブルを畳みかさねることは、なおおなじである。雒は洛と同じく、川の名。

いずれにしても、言葉の内容は、孔子の心にやどった神秘への想念である。あるいはいわゆる「疑古派」の学者のひそみにならえば、「論語」の編者が、孔子の心に宿った想念として、記録したものである。

はじめにもいったように、それは「論語」全体の地色からいえば、例外となるものである。

「論語」の地色は、より多く神秘を拒否する。あるいは少なくとも神秘に冷淡である。

樊遲、知を問う。

子曰わく、民の義を務め、鬼神を敬して之れを遠ざく。知と謂う可し矣。

「雍也」篇のこの言葉は、民、それは人の字と同意であるとすれば、鬼神よりも、人間の尊重を説く。

季路、鬼神に事うるを問う。

子曰わく、未まだ人に事うる能わず。焉んぞ能く鬼に事えん。

「先進」篇のこの言葉は、多少のちがった解釈を容れ得るとしても、「鬼」すなわち死後の人間のことに従うよりも、人間そのもののことにまず従事せよという方向を、どの解釈もはずれまい。

そうしてもつとも総括の語としては、「述而」篇の有名な言葉、

子は怪力乱神を語らず。

そうした地色の中で、鳳鳥、河図、二つの奇蹟、あるいは幻想をいうこの章は、特殊である。特殊な内容が、音声のつらなりのリズムを、一そう複雑に美しくする。

ところでいま私のこの文章が問題としようとするのは、孔子がこの言葉を発した背景である。言葉の奥にある孔子の心理である。あるいは再び「疑古派」のひそみにならない、私もしばらくより多く懷疑的な立場に立つとすれば、それを孔子の言葉として記録した「論語」の編者の心理である。

そのことについては、時代によって解釈に変遷がある。

変遷のけつきよくの帰結となつたのは、靈鳥鳳凰を飛来させ、黄河に図を獻ぜさせるごとき「聖王」が、孔子の時代にはいないのをなげいたとする解釈である。かつての「聖王」である堯舜の治世、また周王朝の初期には、「太平」の祝福として、鳳凰が飛来した。また太古伏羲の世には、河図が黄河から出現した。しかしそうした「聖王」は、現代にもはやいない。吾れすなわち孔子にあるのは、ただ絶望である。

そうした解釈が、近ごろ千年の、ほぼ安定したものとしてある。

十世紀、宋の邢昺の「論語疏」にはいう、

此の章は、孔子、時に明君無きを傷めるを言う也。聖人命を受くれば、則ち鳳鳥至り、河は図を出だす。今は天に此の瑞無し。則ち時に聖人無き也。故に嘆じて曰わく、吾れ已んぬる矣夫と。そを見るを得ざるを傷む也。

「聖人、命を受く」とは、聖天子が天命を受けて、帝位にいることである。それをまのあたり見ることはできない。そうしたなげきとするのである。

邢昺のあと、十二世紀の朱子の注は、それ以後の中国の、また江戸時代の日本の、国定教科書であり、この条の解釈にある含蓄をもつが、といって邢昺を反駁してはいない。日本における注釈の状態も同じであり、十七世紀伊藤仁斎の「論語古義」、十八世紀荻生徂徠の「論語徴」は、江戸時代「論語」注釈の双璧であるが、ともに邢昺の説を引いた上で、自説をのべる。

しかし早い時代には、別の解釈があった。鳳鳥、河図、という二つの奇蹟の祝福をうけるべ

き「聖王」、その存在しないのをなげくというのではなく、二つの奇蹟の祝福をうけるべき人物、それはほかならぬ孔子自身であつたとする。しかもこの二つの奇蹟が、孔子のために現われな
いのを、嘆息して、

鳳鳥至らず、河は凶を出ださず、吾れ已んぬる矣夫。

といったとする。

この説の根底には、一つの思考がある。すなわち孔子の救世主としての自覚には、みずから地上の皇帝として君臨するという希望、あるいはそれが自己の運命であるとする自覚を、ともなつていたというのである。

前に安定した説としてのべたものが、おとなしいのに対し、この説の方は、おとなしくない。そうして「論語」の解釈が書かれたさいしょの時期である漢代には、むしろこのおとなしくない説の方が、有力であつた。

私自身は、どちらの説とも又ちがつた説を、このごろはいだいている。しかしそのことはずつとさいごに述べるつもりである。まず漢代の状態から、変遷の歴史について、せいぜいゆつくりと話をすすめてゆきたい。

キリスト紀元を前後に二百年ずつの年数でさしはさむ漢帝国は、あだかもキリスト紀元前二百年が前漢の時期であり、後二百年が後漢の時期である。つまり西紀前二世紀から後二世紀まで、孔子の時代から起算すれば、その死後三百年から七百年までの時期である。それは孔子の教えが、以後二千年、今世紀の革命に至るまで、民族の倫理として確定しつづけるはじまりで